

# アレン・ギンズバーグの道元禪

—— 只管打坐 ——

田 中 泰 賢

私はアメリカの詩人、ゲイリー・スナイダー、ウォレス・ステイヴンズ、ケネス・レクスロス、フィリップ・ウェーレン、アレン・ギンズバーグについていくつか論じてきた。その際仏教に関する文献も引用させて載っている。それは仏教学者、宗教学者、僧侶、評論家等々の方々の大変な労苦によって刊行されている種々の辞典類、研究書、現代語訳、解説書、講釈書等々のおかげを受けていることを改めて感謝する次第である。

私は寺院（島根県、隠岐、今津、曹洞宗完全寺）で生まれ育った。この寺院は明治2年（1869）の排仏毀釈<sup>1)</sup>によって無残にも焼き払われた。当時の住職、大谷洞岳（大和尚、完全寺九世、明治42年寂）は信教の自由を守る為、排仏という乱暴な行為に屈せず、御本尊（薬師瑠璃光如来）を命を張って護持した。御本尊を背負い、山を幾つか越えて、小船に身をかくして島を脱出した。しかしそれは危険な賭であった。その後、檀信徒は大坂、岡山まで出向き御本尊と大谷洞岳の帰寺を懇請した。住職に復帰することは固辞し、一般の民家で過ごした。金光明最勝王経一字一石の塔を建立し、檀信徒の良き相談相手として、心の支えとなった。排仏後、完全寺は大本山総持寺御直末として再出発したのである。そのような寺院に生まれ育ったのも仏縁であると思う<sup>2)</sup>。

さてそのような仏縁に出会ったアメリカの詩人、アレン・ギンズバーグ（1926-）について述べてみたい。彼はコロンビア大学を卒業後、カリフォルニア大学バークレイ校の大学院に入るが退学して詩人をめざしている。しかしそれはいちかばちかの決断であった。現在彼は、

アメリカ芸術院会員 (Burroughs and Ginsberg have become members of the American Academy of Letters)<sup>3)</sup> である。

ギンズバーグの詩集『白いかたびら』(WHITE SHROUD)を訳した高島誠は「私の手元に1989年11月13日のニューヨーク市立大学フルックリン校ウルフ・インスティテュート発行のウィリアム・ブレイクの歌というパフォーマンスのちらしがある。朗読するギンズバーグは秀れた英米文学教授、アメリカの指導的詩人のひとり、代表作『吠える』は非難中傷に耐え今世紀最も広く読まれた詩集<sup>4)</sup>と述べている。確かに1956年の10月にこの詩集が発行されたが「『吠える・その他の詩編』の発禁を発動したのはサンフランシスコ市警察と税関であったと言われるが、このことに税関が関与したのは『吠える・その他の詩編』がイギリスで印刷されたからであろう<sup>5)</sup>と諏訪優は述べている。マイケル・シューマッハー (Michael Schumacher) も分厚いアレン・ギンズバーグについての伝記 *Dharma Lion* のなかでこの事について詳しく述べている。ギンズバーグがモロッコのタンジールという港市に滞在していた時、彼の詩集『吠える』がアメリカにおいてトラブルを引き起こしたことを知ったのである。

イギリスで印刷された初刷は事件もなく無事にサンフランシスコに届いたが、2刷はそうはいかなかった。“On March 25, [1957年筆者記入] the San Francisco office of U. S. customs, led by Chester Mcphee, a known advocate of book censorship, seized 520 copies of the 3,000-copy shipment of the second printing of *Howl*.”<sup>6)</sup> この詩集の出版元シティ・ライツ書店の責任者ファーリングゲティは、防御すべくサンフランシスコ・クロニクル新聞で論陣を張った。しかし警察は1冊の詩集を購入した後、間もなく踏み込み書店従業員ムラオ・シゲヨシを逮捕し、不在であったファーリングゲティに逮捕礼状を送達した。“The showdown commenced on May 21, 1957—two days after Lawrence Ferlinghetti’s defense of “Howl” had appeared in the San Francisco Chronicle—when two plain-clothes police officers entered the

City Lights Bookstore and purchased a copy of *Howl and Other Poems* for seventy-five cents. A short time later, the police arrested Shigeyoshi Murao, the bookstore clerk, and served a warrant for the arrest of Ferlinghetti, who was not in the store at the time.”<sup>7)</sup>

バリー・マイルズ (Barry Miles) によるとシゲヨシは法廷に連行され指紋押捺と写真を撮られ、小便臭い泥酔者保護室、俗にトラ箱に拘置された。“Shig [eyoshi 筆者記入] was taken the three blocks to the Hall of Justice, where he was fingerprinted and photographed, then locked in the drunk tank, which smelled of piss.”<sup>8)</sup> 1957年10月3日の判決ではクレイトン・ホーン判事は『吠える』はわいせつ文書にあらず、出版社も無罪であると言い渡した。『吠える』の勝利であった。裁判の終わった時にはすでに4刷になっていた。この詩集はアメリカ中で読まれていた<sup>9)</sup>。

その『吠える』の序文を書ってくれたのはアメリカ現代詩の巨匠、ウィリアム・カルロス・ウィリアムズ (William Carlos Williams, 1883-1963 医師) であった。私がアメリカの古書店で求めた1976年版の *HOWL AND OTHER POEMS* を見ると *HOWL FOR CARL SOLOMON* と題する序文がある。その半ばあたりに「驚くべきことは彼が生きてきたことではなく、ほかならぬ奈落の底から愛することの出来る友に出会ったことである。」(The wonder of the thing is not that he has survived but that he, from the very depths, has found a fellow whom he can love) と書かれている。これはギンズバーグと詩人カール・ソロモンとの出会いについて述べたものである。

ギンズバーグは1949年6月コロンビア大学精神医学研究所で診療を受けたが、その時同じく治療を受けていたソロモンと出会ったのである。八か月後退院し、パタソンに戻り、父親の許で暮らした。そのころウィリアムズに出会っている<sup>10)</sup>。この序文ではソロモンとギンズバーグの出会いが述べられているが、同時にウィリアムズとギンズバーグの出会いが分かるのである。何故なら暖かい応援の言葉を与えたウ

イリアムズとそれに答えたギンズバーグにはまさに感応道交ともいえるものが察せられるからである。今春、4年ぶりにサンフランシスコを訪ね、市内バスに乗った時そのバスの中の、あるポスターにウイリアムズの詩が掲載されているのに気が付いた。わたしは常備していたノートに早速その詩を書き留めた。

### EL HOMBRE

It's a strange courage  
You give me ancient star:  
  
Shine alone in the sunrise  
toward which you lend no part!

男

君が僕に古代の星をくれたのは  
不思議な勇氣：

それは日の出に独力で輝く  
君が一片もつけ加えることなく！

（田中泰賢訳）

（原文を掲載するにあたって *The Collected Poems of Williams Carlos Williams Volume I. 1909-1939*. Ed. A. Walton Litz and Christopher MacGowan (New Directions, 1991), p. 76. から引用した。）

私がこの詩をポスターから写し終わると、一人のアメリカ人女性が話し掛けて来た。ウイリアムズの詩をとうして見知らぬものどうしが声をかけあうことが出来た。詩を少し勉強している誇りを覚えた。ともあれウイリアムズはギンズバーグにとって尊敬し、学ぶべき大詩人であった。

ギンズバーグは多くの優れた人々との出会いをしている。仏教との

出会いにおいてはまずジャック・ケルアック (Jack Kerouac 1922-69) が挙げられる。1952年の頃、ケルアックから仏教についての手紙を受け取っている<sup>11)</sup>。それがきっかけとなってギンズバーグは仏教を学び続けている。ケルアックは詩人としてのギンズバーグにとって、ギンズバーグと仏教との出会いについて、またアメリカ文学にとって重要な作家・詩人である。

ケルアックの作品が幾つか邦訳されている。例えば『ジェフィ・ライダー物語』(中井義幸訳 講談社)がある。これは *The Dharma Bums* が原典である。現在手に入らないという。これはぜひ仏教を知りたい若者に読んで欲しい書物である。そうすればケルアックと仏教との関係、そのケルアックから仏教の糸口を学んだギンズバーグが理解出来ると思う。同じ原典から『禪ヒッピー』(小原広忠訳 太陽社)が出版されている。また『地下街の人々』(*The SUBTERRANEANS*, 古沢安二郎訳 新潮社), 『路上』(*ON THE ROAD*, 福田実訳 河出書房新社), 『ビッグ・サー』(*BIG SUR*, 渡辺洋・中上哲夫訳 新宿書房), 『荒涼天使たち』(*DESOLATION ANGELS I・II*, 中上哲夫訳 思潮社), 『ジャック・ケルアック詩集』(*Selected Poems of Jack Kerouac*, 池澤夏樹・高橋雄一郎訳 思潮社)がある。

ギンズバーグと仏教との出会いはゲイリー・スナイダーやフィリップ・ウェーレンとの親交によって深まっていった。特に禪仏教について。ギンズバーグはそれだけでなくチョギヤム・トゥルンパ等からチベット仏教を学んでいる<sup>12)</sup>。仏教を学ぶことは昔に戻る事ではない。仏教は帰り道ではない。仏教はギンズバーグが歩む様に、現在を歩む道である。極端に偏らない中道であり、最上の道である。そしてそれは探求の道である。

ギンズバーグがインドに来たのは1962年2月15日であった。それから翌年の5月末頃まで滞在した<sup>13)</sup>。当時のギンズバーグはシティ・ライツから年間約八百ドルから千二百ドルを得、ほかにグゲンハイム資金、わずかばかりの原稿料、それらによってくらしていた。オロブス

キーと二人連れではあったが、バナラスは部屋代も安く（ギンズバーグは貧民アパートのような部屋に住んでいた）、食うことにも着ることにもあまり気を使う必要はなく、そうした金で十分であったらしい<sup>14</sup>）。

ギンズバーグが住んでいた所は、野菜売りやガンジス川を行き交う沐浴者達、彼らにたかる乞食者等で騒がしく、聖なる牛や猿もぶらついていて<sup>15</sup>）。ギンズバーグは、仏教の真髓に触れるために、まずインドの風土に適合しようと努力したようである。たとえば彼は、ガンジス川のガートで、ガンジスの流れに身をひたしたり、ヒンズー教の聖なる儀式である死体焼却などをたえず手伝った<sup>16</sup>）。ガートとはガンジス川の川岸に階段状になっている沐浴場。ここで沐浴者は聖なるガンジス川で身を清める。

インドで生活しているギンズバーグとピーター・オロブスキー（Peter Orlovsky）を日本からゲイリー・スナイダーとジョアンヌ・カイガー（Joanne Kyger）が訪ねている。カイガーの1962年4月14日の日記によると、ギンズバーグがカイガーのピンクの櫛を使うけれど、ギンズバーグの髪が汚いのでカイガーは櫛を洗って、手入れをしていた、と記録されている<sup>17</sup>）。

スナイダーの記録によると、4月10日にギンズバーグ、オロブスキーとスナイダーがエローラ石窟を訪ねている<sup>18</sup>）。ギンズバーグはインド滞在中において、このエローラ石窟寺院に深い印象をうけている<sup>19</sup>）。確かにここを訪れる人はたいてい、そこに漂う聖なる雰囲気にも畏れを抱くはずである。私も昭和54年12月のインド仏蹟参拝の旅において、このエローラを訪ねた時、インド文化の偉大さに感動したことを思い出す。だからギンズバーグがそこにインド芸術の崇高性を見抜き、ミケランジェロのルネッサンスがちゃちなものに見えたのも当然であろう。ギンズバーグには、ギリシャで見たどんなものよりもエローラははるかに偉大であった<sup>20</sup>）。ギンズバーグはそのようなインドの国を最大級の言葉を用いて、この地球上で最も偉大なる国と褒めたたえてい

る<sup>21)</sup>。

ギンズバーグのインドでの生活では読書も欠かせないものであった。ヒンドゥー教、仏教、インド文学、東洋思想等を大量に読んでいった<sup>22)</sup>。そのみならずギンズバーグはサンスクリットを学び、ベンガル地方の詩などにも関心をもったようであった<sup>23)</sup>。インドの古典語、古典音楽、神話にも親しんだのである<sup>24)</sup>。

アジャンタ石窟を訪ねた時、スナイダーが般若心経を読経するのをギンズバーグは聞いたのである。それは素晴らしい感銘であった<sup>25)</sup>。ギンズバーグにとって、このスナイダーの般若心経の響く声は大きな衝撃であったと思う。私がカリフォルニアのデーヴィスに滞在していた（1990-91）時、S氏が訪ねて来た。彼の訪問は実に有り難いものであった。これから彼はドイツのミヒャエル・エンデを訪ねるとのことであった。そのとき彼はギンズバーグのことを話した。彼がギンズバーグを訪ねた時、ギンズバーグはいきなり般若心経を読経し始めたので一緒に読経した、と語っていたことを思い出す。やはり般若心経はギンズバーグにとってあのインドで聞いて以来格別なものになったにちがいない。般若心経が日常生活の一部になってしまうほど読経し続け、体に入り込んでしまったものと思われる。

ギンズバーグはアメリカに帰る途中、日本に立ち寄りスナイダー達と再会している。そしてスナイダーといっしょに寺院において坐禅を始めるのである<sup>26)</sup>。まだこの時は結跏趺坐を組み、背筋を伸ばし、臍下丹田の呼吸で坐禅を続けることには慣れていなかった。坐禅は足に苦痛をもたらしたけれど、坐禅は興味深い内省的効力へと導いてくれた。このような修養は心を散漫にすることなく、集中させ、体もバランスがとれてリラックス出来た<sup>27)</sup>。坐禅は決して健康法ではない。しかし私が坐禅を始めたのは大学を卒業した春、常福寺（鳥取、日南町）においてであった<sup>28)</sup>。しばしば便秘に悩まされていたが坐禅を続けているうちに便秘はなおっていた。便秘を直すために坐禅を始めたのではなかった。私のように便秘の人が坐禅をしたからといって直る保証

はないだろう。健康の為に坐禅をするのは邪道である。しかし今26年  
余りたって初めて述べたように坐禅の調身は人によって反応は様々で  
あれ、良い影響を与えることは間違いないと思う。ギンズバーグは10  
年前のケルアックの様に、スナイダーを偉大な霊性の持主として、ま  
た知性、個人主義、芸術的才能の手本と見なした。こういった総てが  
仏教への基本となっていた<sup>29)</sup>。

ギンズバーグは1980年から1985年までの作品を集めた詩集『白いか  
たびら』(WHITTE SHROUD) を出版している。その中に坐禅の歌  
“Do the Meditation Rock” がある。

Do the Meditation Rock\*

*Tune: I fought the Dharma, and the Dharma won*

|                        |                            |
|------------------------|----------------------------|
| If you want to learn   | how to meditate            |
| I'll tell you now      | 'cause it's never too late |
| I'll tell you how      | 'cause I can't wait        |
| It's just that great   | that it's never too late   |
| If you are an old      | fraud like me              |
| or a lama who lives    | in Eternity                |
| The first thing you do | when you meditate          |
| is keep your spine     | your backbone straight     |
| Sit yourself down      | on a pillow on the ground  |
| or sit in a chair      | if the ground isn't there  |

*Do the meditation*                      *Do the meditation*

*Learn a little Patience and Generosity*

|                          |                   |
|--------------------------|-------------------|
| Follow your breath out   | open your eyes    |
| and sit there steady     | & sit there wise  |
| Follow your breath right | outta your nose   |
| follow it out            | as far as it goes |

Follow your breath                      but don't hang on  
to the thought of yr death            in old Saigon  
Follow your breath                      when thought forms rise  
whatever you think                    it's a big surprise

*Do the meditation                      Do the meditation*

*Learn a little Patience and Generosity*

*Generosity   Generosity   Generosity & Generosity*

All you got to do                      is to imitate  
you're sitting meditating            and you're never too late  
when thoughts catch up              but your breath goes on  
forget what you thought              about Uncle Don  
Laurel Hardy Uncle Don              Charlie Chaplin Uncle Don  
you don't have to drop              your nuclear bomb  
If you see a vision come              say Hello Goodbye  
play it dumb                            with an empty eye  
if you want a holocaust              you can recall your mind  
it just went past                      with the Western wind

*Do the miditation                      Do the meditation*

*Learn a little Patience              & Generosity*

If you see Apocalypse                in a long red car  
or a flying saucer                      sit where you are  
If you feel a little bliss              don't worry about that  
give your wife a kiss                when your tire goes flat  
if you can't think straight            & you don't know who to call  
It's never too late                    to do nothing at all  
Do the meditation                      follow your breath  
so your body & mind                  get together for a rest

*Do the meditation*

*Learn a little Patience*

If you sit for an hour

you can tell the Superpower

you can tell the Superpower

& to stop & meditate

*Do the meditation*

*Get yourself together*

*& Gernerosity Gernerosity*

*Do the meditation*

*and Generosity*

or a minute every day

to sit the same way

to watch and wait

'cause it's never too late

*Do the meditation*

*lots of Energy*

*Gernerosity & Gernerosity!*<sup>30)</sup>

St. Mark's Place, Xmas 1981

\* Buddhist Samatha-Vipassana Sitting Practice of Meditation

不動の坐禅をしよう\*

正しい調子：仏法と戦い、仏法に帰依した

坐禅の仕方を 学びたいなら

今 君に教えよう 遅すぎることはないから

仕方を君に教えよう 延ばすことは出来ないから

坐禅はとびきり優れているから 遅すぎることはない

君が僕のように年老いた 食わせ者でも

或は 永遠に 生きるチベット僧であっても

君が坐禅をする時 まず行うことは

君の背骨 脊柱をまっすぐに保つこと

床の坐蒲に結跏趺坐す

結跏趺坐する場所がなければ 椅子でよい

坐禅をしよう 坐禅をしよう

少しばかりの忍辱と寛容を学ぼう

息を吐いて 眼は開けたまま

不動の坐に徹し 賢明な坐を行い  
鼻から息を吸い 息を吐く  
正しい呼吸 長ければ長いまま  
短かければ短いままの呼吸 とらわれるな  
昔のサイゴンでの 死の想いに  
思いが沸き上がる時 息に戻る  
君が思うもの総てが 大きな驚き  
坐禅をしよう 坐禅をしよう  
少しばかりの忍辱と寛容を学ぼう  
寛容 寛容 寛容 そして寛容

君がすべきことは [正しい坐禅を] 手本にすること  
坐禅をするのに 遅すぎることはない  
思いが持ち上がっても 息に戻る  
思いを手放しに アンクル・ドンについて  
ローレル ハーディ アンクル・ドン チャーリイ・チャップリン  
アンクル ドン  
核爆弾を 落とすには及ばない  
夢が見えたら さようならと言おう  
眼を空にして 無言で行動  
大量虐殺したい時 健全な心呼び戻そう  
西部の風と共に 邪悪な心は過ぎ去った  
坐禅をしよう 坐禅をしよう  
少しばかりの忍辱と寛容を学ぼう

長く赤い車の中に 或は空飛ぶ円盤に  
黙示録を見たら 君が今いる所で坐ろう  
無上の幸福をちょっとでも感じたら くよくよすまい  
車がパンクしたら 君のワイフにキスしよう

素直になれない時 誰を呼んだらいいかわからない時  
坐禅をしよう 息に従って  
身も心も 共に安楽を得る  
坐禅をしよう 坐禅をしよう  
少しばかりの忍辱と寛容を学ぼう

毎日一時間坐れば 毎日一分坐れば  
超大国に 同じように坐るよう忠告出来る  
超大国に 目を覚まし待つことを  
中休みして坐禅するように忠告出来る 遅すぎることはないから  
坐禅をしよう 坐禅をしよう  
自制して 多くのエネルギーを  
寛容 寛容 寛容 そして寛容！

1981年クリスマス 聖マルコの地にて

※サマサ・ヴィパッサーナ僧 摂心

(田中泰賢訳)

この詩は5連から成っている。各連の終わりの部分は若干の違いはあるが、核として「坐禅をしよう 坐禅をしよう／少しばかりの忍辱と寛容を学ぼう」(*Do the meditation / Do the meditation / Learn a little Patience / and Generosity*) が繰り返され、リズムカルな調子になっている。1連が12行でその中にイタリック体が2行、2連が11行でその中にイタリック体が3行、3連が1連と同じく12行でその中にイタリック体が2行、4連が10行でイタリック体が2行、ただしイタリック体の部分を除けば2連と同じ8行、最終連は7行でイタリック体の部分は2連と同じ3行である。整理してみる。

1連 10行+2行(イタリック) = 12行

2連 8行+3行( ) = 11行

3連 10行+2行( ) = 12行

4 連 8 行 + 2 行 (    ♪    ) = 10 行

5 連 4 行 + 3 行 (    ♪    ) = 7 行

イタリックを除く部分では、1, 2 連と 3, 4 連でそれぞれ偶数の 10, 8 行がくり返され、イタリック体は 1, 2 連と 4, 5 連がそれぞれ偶数、奇数の 2, 3 行をくり返す計算された構成になっている。

脚韻 (end rime) は完全韻と不完全韻の混成であるがイタリック体を除いた部分は上から順に 2 行ずつ押韻している。ただし 1 連の 9, 10 行には脚韻が見られない。そのかわり中間韻 (internal rime) がみられ、9 行の “down” と “ground” は不完全韻で、10 行の “chair” と “there” がそれぞれ押韻している。

完全韻の場合、上で述べた “chair” と “there”, あるいは 1 連, 3 行の “wait” と 4 行の “late” といったように総て男性韻 (masculine rime) である。不完全韻の場合、近似韻 (slant rime) で占められている。例外的に 3 連, 9 行 “mind” と 10 行 “wind” は視覚韻 (eye rime) である。

表題にある “Rock” は音楽のロックの意味もあろうが、同時にここでは坐禅のことについて唄われていることを思えば不動なる岩山のごとく姿勢を保つ坐禅のことも暗示している。それを道元禪師は『普勸坐禅儀』において「兀兀として坐定して箇の不思量底を思量せよ。不思量底如何が思量せん。非思量。此れ乃ち坐禅の要術なり」<sup>31)</sup> と述べている。この詩を読むと、この『普勸坐禅儀』をもとにして出来上がったのではないかと思う。アメリカの詩人達は様々な禅や仏教に関する詩を書いている。しかしこのように、禅の核心ともいえる坐禅の仕方についての詩はギンズバーグが初めてではないだろうか。ギンズバーグがこのような具体的な詩を書いているのを見ると、モルガン・ギブソンが “Ginsberg has probably done more than any American-writer, even more than Kenneth Rexroth, Gary Snyder, Philip Whalen, and Alan Watts, to transplant Buddhism to American soil, transforming it into a radical spiritual movement.”<sup>32)</sup> と述べているの

も領かれる。

1970年頃にはすでにギンズバーグにとって坐禅は日課となっており、現在彼は大学院での授業を受け持っているがその授業の最初に坐禅を行うという<sup>33)</sup>。

この詩の1連の6行に“lama”という言葉が見られる。山口瑞鳳によると、「ラマ教」の称は、古くカトリックの伝道士達がチベットに入ってその宗教に接し、仏教であるという認識が確立される以前に、その優れた教義、厳格な教団規律、荘厳な儀礼に心を動かし、キリスト教の異教化したものに違いないと判断して「ラマの宗教」と呼んだのに由来する<sup>34)</sup>。とんでもない判断違いをしたものである。そこにキリスト教伝道士の無知と驕りを感じる。しかしキリスト教伝道士だけを責めることは出来ない。山口瑞鳳はチベット仏教に対する私達の偏見についてこのように語っている。「この日本人は貧困を軽蔑し、異なった風俗は劣ったものとみなす。そのような環境の一つにあったチベットの仏教を日本の仏教より優れているわけがないと誰でも考えた。従って、チベットの仏教を「ラマ教」と呼んで、その説明に「土俗の宗教と混淆したもの」とか「仏教の墮落した形態の一派」とまで辞書類に記録して見下したのである」<sup>35)</sup>。田中公明は「チベット民族最大の叡知は、アジアの普遍宗教であった仏教を受容し、それを伝承発展させるために、自国の風土に最適のシステムを構築したことであろう。巨大な寺院と過大な出家僧の存在は、人口の抑制に効果的であった」<sup>36)</sup>と鋭い指摘をしている。インドのブダガヤで五体投地の礼拝を繰り返していたチベットの人々の敬虔な態度を思い出す。矢口以文はギンズバーグが「私はもっともっとラマ教を学び、坐禅をしたいと思っています。この部屋で毎日坐禅をします」と語った様子を伝えている<sup>37)</sup>。チベット仏教も、道元禅も同じ大乘仏教とはいえ、両者が非常に近いことを後で少しふれたい。

この詩の1連において坐禅は優れたものと唄われている。道元の『普勧坐禅儀』をみると次のように書かれている。「坐禅をするとき、た

ちどころにもものみないのちが輝くのであって、ことさらに神秘的な境地を模索することもない。」（小倉玄照訳。以下氏の訳を使用させて戴く）<sup>38)</sup> 坐禪をすると総ての命が輝くように素晴らしいものである。そうするとことさらに神秘的な境地を求めることはいらないのである。秦慧玉は「神通力を得たとか、修証を了<sup>りょう</sup>じたとかいうような連中には、決してこの禪の活手段はわかるものではない」<sup>39)</sup> と述べて神通力とか超能力とかいったことは道元禪とは無縁のものであると説いている。増永靈鳳も「ヨーガでは、神通力の引発を力説していますが、禪はそのような神通力を認めません」<sup>40)</sup> と述べている。道元禪の優れた指導者であった両者が口をすっぱくして、神通力が道元禪とは何の拘りもないことを今から30年も前に説いている。このことを現代の人々がもっと謙虚に受け止めておくべきであったと悔やまれる。

しかし今からでも遅すぎる事はない。アメリカのギンズバーグでさえ、遅すぎる事はない。さあ坐禪をしよう。引き延ばす事なく、今坐禪をするなら教えようと勧めているではないか。しかしこの愛知学院においてさえ坐禪はおろか仏教を疑っているものをみかける。はては建学の仏教精神を無くそうという声さえ聞く。まことに油断のならないことである。『普勸坐禪儀』では「お釈迦さまが、菩提樹<sup>ぼだいじゆ</sup>の下で六年間ひたすらに坐禪をつとめられたあとかたを見たらあきらかであろうし、中国へ正しい仏法<sup>ぶつぽう</sup>を伝えられた達磨<sup>だるま</sup>さまが、その後さらに九年もの年月、ただ面壁して坐禪をつづけられた有名な故事からも惚<sup>しの</sup>ばれる。お釈迦さまや達磨さまですらそうであった。今どきの私ども凡夫<sup>ぼんぶ</sup>がどうして坐禪を努めぬかぬということがあろうか」（小倉訳）<sup>41)</sup> と説いて坐禪を勧めている。道元の言葉こそ現代においてなにはさておいても実践すべき最も大切な事柄である。ギンズバーグは坐禪をするのに年老いた食わせ者であれ支障はないと唄う。道元も『正法眼蔵』において仏道を学ぶのに老若男女貴賤等の差別は打ち捨てなければならないと説いている。

ギンズバーグは3連において正しい坐禪を主張している。『普勸坐

禅儀』は「ものの見方にわずかの狂いがあれば、価値観はひっくりかえってしまい、少しでも自分の感情のままに生き方のよしあしを判断するようになると、ことはこんがらがっていのちの本体を見失ってしまう」（小倉訳）<sup>42)</sup>と述べている。内山興正は「もし正しい坐禅をせず、反則して「ヘンな坐禅」を長年つづけていると、人格そのものがヘンになってしまいますから、まったく恐ろしいことです」<sup>43)</sup>と正しい坐禅の重要性を語っている。大洞良雲も「第一歩の踏み出し、すなわち初一念という出発点を誤ったならば、遂には天と地との距たりができってしまう」<sup>44)</sup>と坐禅の第一歩がいかに大切であるかを説いている。

この正しい坐禅を道元禅では只管打坐<sup>しかんたざ</sup>という。山田靈林は「只管打坐は、ただひたすらに身の姿勢を正して坐ることあります」<sup>45)</sup>と説くように体の姿勢を正すことから始める。これは道元禅の特色である。橋本恵光は「只管打坐とは、坐禅ひとつに身心のまことを力一杯つくすことだ」<sup>46)</sup>と提唱している。坐禅は身と心が一体となっていくものである事が分かる。樽林皓堂も「只管打坐の理解において、最も重要なことは『成道釈尊の坐禅』をそのままわれわれの坐禅とする、ということである」<sup>47)</sup>と述べているが、これはさきほどの『普勸坐禅儀』の教えを伝えたものである。

ギンズバーグの1連から2連にかけて坐禅の用心が唄われている。結跏趺坐し、背骨を真っすぐに伸ばし、息を吐いて、眼は開けたまま、鼻から息を吸って吐く。呼吸は長ければながいまま、短かければ短いまま、と唄う。『普勸坐禅儀』では次のように説かれている。「普通の坐禅する場所には、厚い敷物を敷き、その上に坐蒲を置いてそこに坐る。その坐法には、結跏趺坐と半跏趺坐とがある。結跏趺坐というのは、まず右の足を左の脛<sup>もも</sup>の上に置き、左の足を右の脛の上におく。半跏趺坐はただ左の足を右の脛の上におくだけである。袈裟のひもはややゆるめにして坐るが、衣服のかたちはきちんと整えるようにせよ。次に右の手を左の足の上に置き、左の掌を右の掌の上におく。ふたつのおやゆびの先をそっとつけあわせて円い相<sup>すがた</sup>を作る。そのまま正身

端坐する。右に傾いたり、左にかしいだり、前かがみになったり、  
後にそりかえったりしてはならぬ。耳と肩とが対し、鼻と臍とが向  
かい合うようにせよ。舌は、上あごにつけ、唇も歯も、上下きちんと  
合わせる。目は、かならず開くようにせよ、呼吸は鼻でごく自然に寂  
かにせよ。からだのかたちを整えたなら口を開き息を長く大きく吐き、  
左右にからだをゆすることをして、みじろぎもしない坐禪の体勢に入  
り、坐る。内言語を否定した思考を思考するのである。内言語を否定  
した思考とは如何なる思考であるか。それは体で思考することである。  
このことがとりもなおさず坐禪の心がまえのかめなのである。」（小倉  
訳）<sup>48)</sup>

秋野孝道は「坐禪の最初に息を調えることは大変大切なことであり  
ます。息が調はないと心が調って来ない」<sup>49)</sup>と鼻より通じる息につい  
て用心を促している。橋本恵光は「参禪以外には正しい調息の仕かた  
を体現する道は、わたくしには見つかりません。思うてここに至れば  
参禪は、この世にひまあきになってしまった人物が、物好きやのもて  
あそび仕事とは、全然わけが違うことが分かり、たれでもかれでも、  
ぐずぐずはしてられない、一とき早やに参禪に取りかからねば、生  
命の本具の徳を体現しないで、この世をお暇してしまう、これではな  
らんという実感がひしひしと胸に迫ってくるではありませんか」<sup>50)</sup>と  
語っている。これはまさにギンズバーグが詩の中で坐禪を延ばすこと  
は出来ないから今始めようと唄っていることが間違っていないことを  
示す言葉である。

ギンズバーグは2連で過去のことに囚われたりするように様々な思  
いが浮かんでくれば息に戻るように唄う。内山興正は「正伝の坐禪は、  
坐禪することが目的であって、決して坐禪が何かのための手段であっ  
てはならない」<sup>51)</sup>と道元禪のありかたを語っている。鎌谷仙龍も「坐  
禪が仏坐であり、同時に坐仏である。坐禪そのものが、ほかでもない  
仏そのもの」<sup>52)</sup>と悟りを求めるでもなく、一坐一坐に徹することが坐  
禪の眼目であると提唱している。チベット僧であったチョギヤム・ト

ウルンパとタントラ研究の第一人者であるハーバート・V・ギンター博士の著書『タントラ 叡知の曙光』で「悟りを開きさえすれば、そのプロセスが完了し、一切がそれでおしまいというわけではないのです。むしろ、私たちの生はとぎれることなく続いているというのが事実であり、それゆえに私たちはたえず新しいスタートを切らなければならないのです」<sup>53)</sup>と述べている。この考え方は何と道元禅と似ていることか。ここにチベット仏教と道元禅の共通点を見いだすことが出来る。またかれらは「西洋では心は身体より優位にあるとする考えにわれわれは慣らされています。つまり身体を見下げています。でも、これは大変浅薄な考えです」<sup>54)</sup>と述べている。そうすると身体から始める道元禅は今日忘れられてしまいがちなありかたを呼び起こす重要なものであることが分かる。

玉城康四郎はこのように述べている。「冥想は、古代と現代とが無媒介的に流れ合う、歴史の不思議な鉾脈であろう。たとえば、わが国の道元を考えてみよう。道元の冥想が仏教の開宗者ゴータマ（釈尊）につながっていることはいうまでもない。道元とゴータマのあいだには千五百年以上の時の流れが介在していて、冥想の趣旨もさまざまに変容して道元にいたっている。しかるにゴータマと道元のあいだには千五百年以上の隔たりがあるにもかかわらず、冥想の方法はもとより、その趣旨においても奇妙に一致している。すなわち両者は、いかなる教義や経典にもとらわれず、ただひたすら坐法を徹底することによって目覚めの目標を実現している。」<sup>55)</sup>

これを見ると道元の只管打坐はまさに釈尊の冥想方法であり、それは道元の著述『普勸坐禅儀』や『正法眼蔵』等に懇切丁寧に表されている。また先程述べたチベット仏教とも空間的違いがあるにも拘らず、その根本において違わないのである。道元の只管打坐はまさにその冥想において王道をいくものである。ギンズバーグの場合はギブソンが述べるように “Ginsberg’s meditation practice has ranged from silent zazen to chanting mantras, and from solitary contemplation to the

worship of gurus and deities.”<sup>56)</sup> であろう。ここで“silent zazen”（黙照禪）とあるのは只管打坐のことである。ギンズバーグが道元禪とチベット仏教を学んでいるのは先程のことを考えれば奇異なことではない。ギンズバーグが道元禪とチベット仏教を学んだのは偶然なのか、それともなんらかの関係性を意識していたのか。興味ある所だ。

4連では空飛ぶ円盤を見たといったような類いの幻覚があればすぐに坐って正気に戻ろう、と唄う。或は3連では核爆弾を落とす狂気、大量虐殺を欲する妄想が生じればすぐに坐禅をしようと唄う。小倉玄照は「人間は、直立歩行をするようになって、ややもすると、未来に眼が向かいがちになりました。無常の世を無常のままに、こだわりなく今を生きるのがむずかしくなってきたのです。坐禅はそれを克服するかたちです」<sup>57)</sup>と述べている。又トゥルンパ達も「瞑想の主眼はそうしたトランス状態に発展していくことではありません。むしろ知覚を研ぎ澄まし、物事があるがままに観るという点にこそあるのです」<sup>58)</sup>と説いている。ともすれば妄想、狂気、悪心、に囚われてこだわりのない生活が困難な現代こそ道元禪の只管打坐が力を発揮していくことは間違いないと思う。

内山興正も小倉玄照も言語に焦点をあてて禪を語っているのは興味深い。彼らは言語から離れて坐禅をすることを力説する。しかしそれは徒に言語を否定するというよりは、坐禅はともすれば言語に引きずり回されている自我、言語を絶対視する自我を照らしていくことを示唆している。まさに坐禅は脚下照顧の活作用がある。ジュゼッペ・トゥッチは現代においては「知性が自己の能力を過信して高慢の自己満足に陥ってしまったとき、知性は人間から高貴さを奪い取り、人間を没个性的で恥ずかしい低劣な生き物にしてしまいます」<sup>59)</sup>と手厳しく述べている。知性とは言語に取り囲まれた状態を意味する。しかし言語生活による知性がかならずしも人間を高めていくとは限らない。かえって嫉妬、貪欲、愚かさを増幅しかねない。言語は兩刃の剣である。仏教の八正道に正語（正しい言葉）が説かれている。坐禅は正語、八

正道をめざす王道である。

丸山圭三郎は禅とは違う立場からこう述べている。「文化とは、一面こそ秩序と制度からなるデジタルな二項対立の網であっても、同時にアナログな生命の波動でもある。私たちは二千数百年来西欧に支配的であった〈言語〉の桎梏を脱して、もう一度流動的な言葉と文化の問題をとらえなおさねばならないのではあるまいか。」<sup>60)</sup> 彼の流動的な言語という表現は風雲流水の精神を旨とする禅と一脈通じるものがある。彼は更にこう述べている。「西欧における〈世紀末から世紀末〉へのパラダイム変換はまことに複雑な様相を呈しているが、私たちはその底に二つの大きな流れを読みとることができるように思われる。その第一は、エルンスト・マッハやフェルディナン・ド・ソシュールに代表される〈実体論から関係論へ〉という視座の転換であり、その第二はジグムント・フロイトやグスタフ・ユングらによる〈無意識〉の復権に触発された、意識の表層から深層に移行するヴァーチカルな視点の誕生である。そしてこの二つの〈知〉こそ、じつはずで二千百年近くも以前から、大乘仏教の二大系統とみなされる〈中観派〉（ナーガールジュナ＝龍樹たちの空観）と〈唯識派〉（ヴァスバンドゥ＝世親たちのマナ識・アラヤ識）の哲学の底に見いだされるものであった。」<sup>61)</sup>

この説明は私が長年よく理解できなかつた近代言語学の祖と呼ばれているソシュールの言語観を実に分かり易くまとめている。長年の疑問が氷解して胸踊る気がした。その大乘仏教者「ナーガールジュナはことばを本質としたわれわれの認識過程を倒錯だといっているのである。われわれがなすべきことは、思惟、判断から直観の世界へ逆行することだ」<sup>62)</sup> と釈尊の教えを説いている。その具体的な道はここで述べている坐禅に外ならない。ギンズバーグは“Meditation is the key to sharpening up awareness, of noticing what we notice.”<sup>63)</sup> と述べている。ここでギンズバーグが述べているのは禅でいう開眼である。龍樹の言葉で言えば直観である。ギンズバーグは毎日一時間坐れば、あ

るいは毎日一分坐ればそれがすごい力になると唄う。まことにそうだと思う。

最後に長尾雅人も述べるように、仏教は、ひとふう変わった不思議な宗教である。思いつめた一途<sup>いちず</sup>なところのない、したがって、ある意味で宗教らしからぬ宗教である。第一に仏教は、文字どおりの平和な宗教であった。その歴史の上に、いちども宗教戦争らしいものを見かけない。全アジアに広く信奉されるようになったが、それは帝王の侵略戦争に結びついたものではなかった。政治の弾圧に対して殉教の血を流すということすらほとんど見られなかった。又宗教集団によくみられる中央集権的な首長・統率者によるヒエラルキー（階級性）が仏教にはなかった。比丘の団体がそうであったように、俗人の信徒の団体は、さらに自由であった。彼らは、改宗すら要求されなかった<sup>64)</sup>。まことに仏教はこの原点に帰らなければならない。ギンズバーグはそのような仏教を信奉し、この詩の冒頭にあるように、仏法に帰依したのである。

#### 注

- 1) もし今日誰かが建物を焼き、財産・土地等を奪ったら放火罪、強盗罪等で訴えられるであろう。それはいつの時代でも同じことである。「国分寺、護国寺等の名利を始め、各村々の寺院、草庵一字あますところなく<sup>ママ</sup>廃仏されるにいたった。仏像、仏具等がまず先に処理され、後日、寺院焼却がなされたようである」（『西郷町誌』下巻、昭和51年、70頁参照）。当時一部の者によるこの行為は乱暴極まりないものであり、まことに浅はかな事であった。貴重な多くの物が消失したことは隠岐にとって大きな損失であったことに気付くべきである。この排仏という狂気にたいして御本尊を守った大谷洞岳が亡くなった明治42年に隠岐島誌の編纂が発案されている。ところがである。その書（昭和8年発行）を見ると、排仏の正当化としか思われぬ書き方がなされている。そこには過ちに対する反省や懺悔の言葉が見当たらない。この編集者の見識を疑う。そしてここで引用されている大谷洞岳の手記『難澁迷惑集』その他の手記等は一体どういう経路でこの編集者に渡り、その後その手記等は怎么样了であろうか。

- 2) 私と仏縁について少し述べてみたい。私の祖父母（田中茂市・きみよ）は鳥取県米子市で生計を立てていた。しかし祖父が27才で病死したため、田中家の親戚（茂市の母親のいとこ）であった故福井天章師（当時、米子市、桂住寺住職。後、東京、芝の光宝寺へ転住、札幌の中央寺住職、大本山永平寺副貫首等歴任）に相談した。茂市・きみよの間に生まれていた敏郎（省禅、私の父）を仏門に入れることになった。福井天章の知人であり、隠岐、完全寺の住職をしていた鈴木省吾（完全寺、復興十五世、大心省吾大和尚）の弟子として、私の父は3才の時、隠岐に渡った。鈴木省吾は愛知県東加茂郡足助町新盛の鈴木勇治・はるの次男として生まれた（明治17年5月12日）。明治31年1月、大鷲院住職、小寺黙音師に就いて得度。同年5月、香積寺にて首先安居。36年、山梨県大翁寺にて立職。33年5月より34年8月まで愛知県熱田町、法持寺認可僧堂に安居。その後、山梨県慈観寺認可僧堂、京都府智源寺認可僧堂、福井県臥龍院認可僧堂に安居。43年、鳥根県八束郡、禅覚寺首先住職。大正5年、隠岐、完全寺へ転住。昭和22年4月27日円寂（世壽64才）。大正12年、関東地方震火災遭難者の為救援事業を行い、隠岐島司より表彰を受ける。昭和8年8月、託児所開設の功により大阪朝日新聞社社会事業団より表彰。完全寺は曹洞宗の寺院であるが、毎年1月16日は本堂で念仏会を行う。読売新聞1月17日（1995）の記事によると「数珠を回して無病息災を祈願する念仏会が16日、西郷町今津の曹洞宗・完全寺（田中俊朗住職）で行われ、地元の主婦ら約百人が参加した。念仏会は、百数十年前から同寺に伝わる伝統行事。数珠は、長さ約13メートルに約1900個の玉がついた大数珠。地元では「百万遍数珠回し」と言われ、家族の一人が参加すればその家は家内安全という。地区を東西に分け、毎年交互に〈客組〉と〈働き組〉になり、客組は、本堂で輪になり、数珠を回し続ける。その間、働き組は食事の支度をし、暇を見つけては輪の中に入る」と紹介されている。
- 又、春（4月20-21日）と夏（8月20-21日）は弘法大師（空海）の法要をおこなっている。完全寺の裏山（大師山）には四国八十八ヶ所をモデルにした八十八ヶ所等が配置され、各所に石仏を安置したお堂が建てられている。各堂は各信者が管理している。春と夏の大祭には参拝者は大師山の八十八ヶ所めぐりを行う。
- 3) Pounds, Wayne. *Death Is God and William Burroughs Is His Prophet*, "Studies in American Literature" No.31 (1995), 5.
- 4) 高島誠「訳者あとがき」ギンズバーグ（Allen Ginsberg）『白いかたびら』（WHITE SHROUD POEMS 1980-1985）、高島訳（思潮社、1991）、189頁。

- 5) 諏訪優『アレン・ギンズバーグ』(弥生書房, 1988), 112-13頁。以下諏訪と略す。
- 6) Schumacher, Michael. *DHARMA LION A Critical Biography of Allen Ginsberg* (St.Martin's Press,1992), p. 252. 以下 Schumacher と略す。
- 7) 同上, p. 254.
- 8) Miles, Barry. *GINSBERG A BIOGRAPHY* (SIMON AND SCHUSTER, 1989), p. 227. 以下 Miles と略す。
- 9) 同上, p. 232, 及び Schumacher, pp. 263-64 参照。
- 10) タイテル, ジョン (Tytell, John) 『ビート世代の人生と文学 裸の天使たち (Naked Angels)』大橋健三郎・村山淳彦訳 (紀伊國屋書店, 1978), 143-50頁。及び Schumacher, pp. 112-13 参照。
- 11) タイテル, 151頁。
- 12) 田中泰賢「アレン・ギンズバーグの詩“Sad Dust Glories”について——死者に捧げる——」『愛知学院大学教養部紀要』第42巻第3号 (1995) 参照。以下田中と略す。トゥルンパについては, チョギヤム・トゥルンパ『チベットに生まれて』(武内紹人訳, 人文書院) がある。
- 13) Schumacher, pp. 368-96 参照。
- 14) 諏訪, 215頁。
- 15) Miles, p. 313.
- 16) 諏訪, 215頁。
- 17) Kyger, Joanne. *Journal* (Tombouctou Books, 1981), p. 197.
- 18) Snyder, Gary. *PASSAGE THROUGH INDIA* (Grey Fox Press, 1983), p. 90.
- 19) Schumacher, p. 375.
- 20) 同上引用文中。
- 21) 同上, p. 376.
- 22) 同上引用文中。
- 23) 諏訪, 217頁。
- 24) Schumacher, p. 376.
- 25) 同上, p. 396.
- 26) 同上, p. 393.
- 27) 同上引用文中。
- 28) 常福寺の住職, 佐藤省道師は完全寺, 鈴木省吾の弟子である。その後, 私は各地にて参禪の機会を得た。大樹寺 (鳥取, 郡家町。当時専門僧堂) での参禪。住職の鎌谷仙龍師は永平寺の後堂であった。禅昌寺 (広島市) での住職横山正賢師の指導による13年余りの毎週の参禪会。又一泊参禪会では檜崎一光師 (瑞応寺専門僧堂堂長。現在大本山永平寺副貫首) 等

の提唱を拝聴。大本山永平寺の涅槃会撰心。大本山総持寺の伝光会撰心、成道会撰心。安泰寺（当時、京都市）の撰心。住職内山興正師の指導による撰心を終えて喜び合うアメリカ人の姿を思い出す。松源寺（島根、安来市）の眼蔵会。酒井得元師による提唱。少林窟（広島、忠海町）の参禅。又広島、大阪、静岡の寺院での参禅。以上が曹洞宗。仏通寺（広島、三原）等の臨済宗寺院での坐禅。又新本豊三氏（広島大学教授）宅での毎日曜の坐禅と『正法眼蔵』の読書会（13年余り）に通った。

- 29) Schumacher, p. 450.
- 30) Ginsberg, Allen. *WHITE SHROUD POEMS 1980-1985* (Harper & Row, Publishers, 1987), pp. 21-2.
- 31) 小倉玄照『新普勧坐禅儀講話』（誠信書房，1991），iv 頁。以下小倉と略す。
- 32) Gibson, Morgan. *THE BUDDHIST POETRY OF ALLEN GINSBERG* 『中京大学文学部 [中京英文学]』第9号（1989），24。以下 Gibson と略す。
- 33) 田中，参照。
- 34) 山口瑞鳳「チベット研究の意義」『チベットの仏教と社会』山口瑞鳳監修（春秋社，1986），ii 頁。
- 35) 同上，i 頁。
- 36) 田中公明『チベット密教』（春秋社，1993），10頁。
- 37) 矢口以文『アメリカ現代詩の一面』（旺史社，1983），42頁。
- 38) 小倉，13頁。
- 39) 秦慧玉『普勧坐禅儀』（曹洞宗宗務庁，1966），74頁。
- 40) 増永靈鳳『現代人の禅』（春秋社，1966），206頁。
- 41) 小倉，42頁。
- 42) 同上，30頁。
- 43) 内山興正『宗教としての道元禪 普勧坐禅儀意解』（柏樹社，1977），57頁。以下内山と略す。
- 44) 大洞良雲『現代講話 普勧坐禅儀』（黎明書房，1969），41頁。
- 45) 山田靈林『人間禅話——マカ不思議』（雄渾社，1972），45頁。
- 46) 橋本恵光『正法眼蔵八大人覚講話』（瑞応寺専門僧堂瑞雲会，1967），95頁。
- 47) 樽林皓堂『道元禪の本流』（大法輪閣，1982），14-5頁。
- 48) 小倉，115-16頁。
- 49) 秋野孝道『坐禅用心記講話』（鴻盟社，1980），85頁。
- 50) 橋本恵光『調息のしおり』（宝慶寺，1979），2 頁。
- 51) 内山，58頁。
- 52) 鎌谷仙龍『鎌谷仙龍老師提唱 正法眼蔵袈裟功德 講述』（津島市，海善寺，1976），9 頁。
- 53) ギュンター，H・V／トゥルンパ，C『タントラ <sup>えいち しよこう</sup> 叡知の曙光』宮坂宥洪訳

（人文書院，1992），21頁。以下トゥルンパと略す。

- 54) 同上，125頁。
- 55) 玉城康四郎『東西思想の根底にあるもの』（講談社，1983），20-2頁抜粋引用。
- 56) Gibson, p. 30.
- 57) 小倉，135頁。
- 58) トゥルンパ，54頁。
- 59) トウッチ，ジュゼッペ『マンダラの理論と実際』金岡秀友・秋山余思訳（金花舎，1992），91頁。
- 60) 丸山圭三郎『生の円環運動』（紀伊國屋書店，1992），163頁。
- 61) 同上，218-19頁。
- 62) 梶山雄一・上山春平『仏教の思想3 空の論理〈中観〉』（角川書店，1981），63頁。
- 63) Carolan, Trevor. *NEOBEAT:TOWARD THE BIRTH OF A NEW COOL* “Printed Matter” vol. XIX Nos 1 & 2 (1995), p. 40.
- 64) 長尾雅人「仏教の思想と歴史」『大乘仏典』中央公論社，1993，7-8 頁抜粋引用。